
最強伝説

閑古鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強伝説

【Nコード】

N5786Y

【作者名】

閑古鳥

【あらすじ】

山で爺さんと二人仲良く(?)過ごしていた主人公ファースト。しかし、悲劇は突然訪れた。冬のある日、ハンケツで倒れている爺さんの亡骸を発見する。唯一の家族を亡くしたファーストは、得も言えぬ喪失感に襲われる。そんな時だった。遺品整理のために部屋を片付けていると、遺書が見つかった。「最強流こそ無敵の流派であることを示して欲しい」そんな爺さんの願いを叶えるため、主人公は旅に出ることになる。果たして主人公は爺さんの悲願である最強を証明することが出来るのか？

あらずじとは若干異なる内容が書かれている恐れがあります。各
自の判断の下、読むようにお願いします。

第一話

俺の名前は、ファースト・ニューエイジ。最強（予定）の男だ。大陸の西の果てにある山で、育ての親である爺さんと共に修行に明け暮れていた。

朝起きたらまずは水くみを行う。これが一日に行う最初の鍛錬である。

自分の体の倍以上はある瓶を持って、山の麓にある泉に向かうのだ。その際、熊やら魔物やらが出没する。昔は水をこぼさないために瓶を下ろして退治していたのだが、この頃は瓶を担いだまま、水をこぼすことなく退治することができるようになった。

帰ってからも休むことはない。家の裏庭積まれた薪を素手で割り、その日の食材を確保するために山をかけずり回って狩猟を行う。

罾を設置するのは邪道との爺さんの言いつけを守り、これも自身の肉体のみで達成しなければならない。

是日々修行也。とは爺さんの言葉だが、爺さん自身が修行をしているところは見ることがない。年寄りだから仕方がないのだろうか。

あっちの方はまだまだ現役だったのに。

ともあれ、漫画や小説などで知った普通の生活とはかけ離れたものだったが、それでも俺はその生活に満足していた。

しかし、何気ない日常は簡単に壊れてしまうものだ。冬のある日、別れは突然やってきた。

早朝、俺は寝起きで爆発寸前の膀胱を抱えてトイレまで急いだ。山の冬は厳しく、なかなか布団から出られないためにしばしば引き起こされる現象である。

漏れないように左手でモノを押えながら扉を開けると、そこには顔を真っ青にして倒れている爺さんがあった。

おそろおそろ確認してみると体は冷たくなっており、命の灯火は既に絶えていた。

股間に抱えた決壊寸前のダムとハンケツで倒れている爺さんを前に、俺は言葉には出来ないほどの虚無感に襲われた。

しかし、尿意に待ったはかけられない。

俺はまず爺さんをその辺に放ってからトイレを済ませることにした。

その後、家の裏に穴を掘り、爺さんの亡骸を埋葬し終わってからも心の靄は晴れることがなかった。

……俺は一人ぼっちになってしまったのだ。

全てが終わった後、ふとそんな考えが浮かんだ。

今までの爺さんとの生活が走馬燈のように頭をよぎる。

俺がまだ幼い頃、爺さんが食糧を獲って来れず、二人で励まし合いながら夜を過ごしたこと。初めて自分の背丈の倍以上在る瓶を持ち上げたときに見せた、爺さんの何とも言えない表情。爺さんの秘蔵

コレクションに張り付いていたページがあつたときの得も言えぬ不快感。

何もかもが今では懐かしい。あまり良い思い出ではないが気にしてはならない。

それから数日の間ただ何をするでもなく、食事をとっては寝る、を繰り返す生活を送っていた。

……よくよく考えればいたっていつも通りの生活である。

まあともかく、そんな風は無為な時間を過ごしていた俺を救つたのも、やはり爺さんだった。

晩飯を食べた後、無性に何かがやりたくなった。

放置していた爺さんの部屋を片付けなければ。と漠然と思ったのを切っ掛けに、遺品整理のために部屋を漁った。そこで、秘蔵のエロ本と爺さんが認めていた遺言状を見つける。

「我が最強流こそ、無敵の流派であることを示して欲しい」

この時初めて、俺が最強流の後継者であることを知った。というよりも、何一つ技を教えて貰っていないのだが、それで良いのだろうか。

他にも云々と長ったらしく書いてあつたが覚えていない。正確には面倒なので読まなかった。

エロ本（キャサリンのエッチなところを見せてあげる、はあと）を

使ってコトを致した後、再び遺言状に目をやった。

すっかりした頭に、先ほどの最強流が何々という文面が思い出される。

もしかすると、爺さんは死期が近い事を悟っていたのではないだろうか。そして、俺に望みを託すために遺言を認めたのでは……。

そうならば、その望みを叶えてやらねばなるまい。

俺はグツと右手を握りしめた。

可哀想な爺さんの願いを叶えるため、手荷物一つと手にいれたエロ本を持って、住み慣れた地を離れることを決意した。

最強への道は甘くはないだろう。幾多の試練が次々と俺を襲うに違いない。

山を後にした俺を待ち受ける強大な敵、最強への道を阻もうとする狡猾な罠、そして忘れてはいけけない可愛いあの娘と、キャツキャウフフのラブロマンス。

想像するだけで気持ちが昂ぶる。そんな俺の最強伝説がつい先日始まり、終わりを迎えようとしていた。

「……み、みず」

山を下りてから早一月、限界を迎えた俺は倒れ伏していた。地面の

ゴツゴツとした感触がやけに遠く感じる。

ああ、俺はもう駄目かも知れない。

山を下り、見渡す限りの平野を見た時は感動を覚えたものだが、こんなにも早く絶望することになるとは思いもしなかった。吹き荒ぶ風が俺の心を虐める。

今思えば、街道に従って歩いてきたのに街は見つからず、人の往来もなかったところで怪しいと疑うべきだったのだ。

のほほんと道なりに進んでいくうちに、気がつけば見晴らしの良かった草原はいつしか赤茶けた土に変わり、舞い上がった砂埃によって三メートル先も見えなくなった。

視界が黄土色に染まる前に引き返していれば……。あのときの俺は何を意固地になっていたのだろう。

道がわからないだけならまだ問題はなかったのだが、悪いことは重なるもので、食糧についても問題が発生した。

持参した食糧があつという間に底をついたのだ。これは飯が美味かったのが悪いのだと、俺は思っている。

山での暮らしでは、腹が減ったら狩りをすればよく、喉が渴けば木の実で喉を潤せばよい。狩猟生活に慣れていた俺は、食糧が無くなってもそれほど危惧していなかったのだ。

しかし、ここら一帯は魔物が多いせいもあって、動物などが一匹も存在していなかった。痩せこけた土地に果実など存在はすもなく、

カラカラな地面から生えている草は萎びていて、どう見ても食べられたものではない。

実際一度口にしたが腹を下した。恐らく毒があったのだろう。こんなものを食うなら、俺は死んだ方がマシだと思ったほどである。

食糧問題については、完全に見通しが甘かったと言わざるを得ない。更にこの後の行動も非常にまずかった。

空腹で思考が朦朧としていた時、

——草が駄目なら土を食べればいいじゃない。

どこからかそんな声が聞こえたような気がした。

その時の俺はあまりの空腹に頭が狂っていた。もう一度言う、狂っていたのだ。

名案（迷案）を思いついたと、俺は右手で土をえぐり取ると迷わず口に含んだ。

最悪食べられなくても噛み続けることで飢えをごまかせる、問題ないと自分に言い聞かせながら土を噛みしめた。

口の中のものはじりじりとして、決して心地よいとは言えない食感だが、狙い通りに空腹は紛らわすことに成功。もしかしたら、知らず知らずのうちに飲み込んでいたのかも知れない。

そんなこんなで、空腹はやり過ごせたのだが、その代わりに体の水

分が持つて行かれてしまった。

それに気づかないで三日ほど経った頃だろうか。唾液が分泌されなくなり、土をかみ続けることが出来なくなった。

そして空腹と脱水症状によって、無敵の俺もとうとう限界を迎えてしまったのだ。

腹は今にも背中にくつつくのではないかと思うくらいに減り、喉は渴きすぎて、きつとひび割れているに違いない。

体を支える力を失った俺は、そのまま地面に倒れ伏した。そして今に至る。

……ああ、俺はこんなところで死んでしまうのか。

己の無力さに齒噛みする。

もう少し食糧を多く持つてきていれば、計画的に食事をしていれば、そもそも山を下りなければ。

後悔の言葉が次から次へと浮かんでは消える。俺にはトイレで張りすぎて死んだ爺さんの夢を叶えることすらできなかった。

情けない自分に苦さを感じた。これは、決して口に残っていた土の味ではない。

爺さんの夢を果たせない俺の唯一の心残りは、女の子とニャンニャン出来なかったことだ。

なんだかんだと先ほどから思考に上ってきてはいるが、正直に言えば、爺さんの夢なんてどうでも良かった。街に出て女の子と仲良くなるついでにでも叶えてやろう、程度の思いだったのだ。

ああ、女の子ってどんな匂いがするんだろう。おっぱいって気持ちいいのかな？

何だか頬が冷たい。視界がにじむ。唾液すらも出なくなったはずなのに、目からは涙が流れていた。

こんな状態でも泣いて出るものなんだな。

俺はで持つてきていた工口本を強く強く握りしめる。

いつの間にか風が止んでいた。宙を舞っていた砂埃が段々と落ち着いていき、視界が開けてくる。

顔を上げた視線のその先に場違いな小屋を見つけた。その瞬間、頭の中でスイッチが入れ替わる様な音が聞こえたのと同時に意識を失った。

第一話（後書き）

オリジナル小説の投稿は初めてになります。

書きためていないので完全に見切り発車。そのため不定期更新になるとはいますが、しばしおつきあいただければ幸いです。

第二話

「いつまでこんな生活をせねばならんのじゃろうか……」

リーゼロッテは、以前の豪勢な生活を思い出したため息をつく。

昔は良かった。立派な城に住み、万を超える配下を抱える魔王の娘として君臨していた。全ての魔物はリーゼロッテの命令を聞き、料理も掃除も洗濯も何一つ自分でやる必要なんて無かった。

それが今では一転して、ボロ小屋での不便な生活。生きていく分には困らないが、豪華な生活に慣れたリーゼロッテを満足させるには至らない。

家事も自らの手でやらねばならなくなった。この辺りには川も泉もない。毎日片道一時間かけて水を汲みに行き、何度も往復することによって洗濯が出来るようになる。風呂など滅多に入れたものではない。食糧も遠くまで狩りに行く必要があった。

二十年も経てば、カサカサの指やべたついた髪にも慣れてしまった。

しかし、それでも昔を思い起こすと心が反発せずにはいられない。

「それもこれもあやつらのせいじゃっ！」

リーゼロッテがこの様な生活を強いられているのは、勇者が魔王であつた父を倒してしまつたせいだ。

魔物は凶悪だから、魔王は人間にとって危険だからと、城に乗り込んできた勇者達は、忠義の厚い臣下を殺し、父の首を撥ね、城の財宝を漁つて満足そうに帰つて行つた。

残つた家臣は魔王よりも自らの命を優先した屑どもであつた。やつらは魔王ほど絶対の力を持たぬリーゼロッテを裏切り、あまつさえ城の主を追い出した。

「あやつら、今に見ておれよ」

メラメラと復讐の炎が沸き立つ。ボロボロになった上着の袖をギュツと握り、歯を噛みしめた。

その時だった。ガチャガチャとドアノブを捻る音が部屋に響く。

「な、何じゃ？」

リーゼロッテは突然のことに体をびくりとさせる。

まさか勇者が魔王の娘が生きていることを知りやってきたのではあるまいか、という不安がよぎった。リーゼロッテは父ほどの力は持つてはいないが、それでも人間からすれば脅威であるに違いないのだ。

次第に大きくなる音がリーゼロッテの不安を加速させる。更に正体不明の来訪者は力強く扉を叩きはじめた。

……ドンドン、ドンドン、ガチャガチャ、ガチャガチャ
得も知れぬ事態に背筋が寒くなったリーゼロッテは、耳をふさぎ狭い部屋の中に響き渡る音を遮断しようとする。

どれほど時間が経っただろうか。ドアから響く音が止み、部屋は再び静寂を取り戻した。

「……いなくなった？」

おそるおそる耳から手を離す。魔法で固定化した扉は依然そこにあるままだ。

それを見て安堵のため息をつく。

「なんじゃなんじゃ、驚かせおつて。全く妾も何を怯え……」

・ヒイ！」

頼もしく見えていたドアが音を立てて吹き飛び、リーゼロッテは悲鳴を上げた。ポツカリとあいた空間から、おぼつかない足取りで一人の男が侵入してくる。

「だ、誰じゃ貴様は！？　ここを誰の住処と心得る！」

震える体を押さえつけ、絞り出すように声を張った。

男がくるり、とこちらを睨み付ける。鬼の形相、いや、鬼を超えるほどに恐ろしい顔がそこにあった。脆弱な人間とは思えない程のプレッシャーに、肌がヒリついたものを感じる。

声を掛けるのではなかった、と心の中で後悔するが動き出した口は止まらない。

「何者かは知らぬが、貴様の首が胴に繋がっている内に疾く去ね。ここは貴様のような下賤のものが踏み入れて良い場所ではない！」

口ではそう言ったが、リーゼロッテはすっかり眼前の男に恐怖していた。勇者でさえ勝てぬまでも、恐怖の対象たりえなかったのに、この男は人睨みでリーゼロッテの心を震えさせた。男がゆらりと足を踏み出す。

（殺される！）

詠唱すらも忘れて、目を閉じて固くなるリーゼロッテ。一秒経ち、二秒経ち、三秒が経った。いつまで経っても予想していた衝撃はやってこない。

不審に思い耳を澄めるとゴソゴソと何かを漁る音が聞こえる。ゆっくりと目を開け確認すると、男は食料庫に保存しておいた肉や果

物を頼張っていた。

（腹が減っておったのか？）

獲ってきたばかりの生肉を美味そうに食べる男を見て、安堵と共に背筋に冷たいモノを感じた。つい先日、食料庫の中身が無くなって補充したばかり。

もしも、食料庫に食材がなかったら………思わず口から滴る血を見つめてしまう。

男が食べる手を止め、立ち上がる。食料庫にはまだ食べ物は残っているのに、なぜ………？

（まさか、まさか！）

リーゼロッテは自らの恐ろしい未来予想に目を見開く。

（飢えを満たした獣の様な男。そして、同じ空間には絶世の美女。男が次にとる行動は………）

男が一步、リーゼロッテに近づいた。ミシリと木の板が鳴る。そして、一步またリーゼロッテに近づく。

「こ、来ないでっ！」

身の危険を感じてあげた悲痛な叫び。リーゼロッテはこの瞬間、魔王の娘ではなくただの一人の娘になっていた。

男はリーゼロッテの言葉を無視して、更にもう一步もう一步と、近づき、近づき、通り過ぎる。

「え？」

男はベッドに体を投げ出すと、そのまま完全に動くのを止めた。
予想外の事態にリーゼロッテは思考が停止する。そして、自身の勘違いに顔を赤く染めた。

「ええい、紛らわしいことをしおって！・・・・・・それにしてもこやつ何者じゃ？　これほどの力の持ち主が世に知られておらぬとは考えられぬ」

不審者の顔をじつと眺め、気がついた。

「顔に着いた汚れがシートについてしまうではないか！　後で洗うのは妾なんじゃぞ！」

言い終えて思わず顔を赤くした。庶民じみた言葉を吐いてしまった自分に気がつき恥ずかしくなったのだ。恥ずかしい思いをしたのは目の前の男のせいだ、と半ば八つ当たり気味に思った途端にそれは怒りへと変わり、男が来るまでに燃えていた復讐の炎が再び点火した。

膨れあがった怨みの矛先は男へと向けられる。

好き勝手やらかしてくれた目の前の男を殺してしまおうか。

眼前の男は復讐には関係ない存在である。だが、勇者と同じ人間というだけでリーゼロッテの復讐の対象となり得た。加えて目の前の男はすっかりと眠りこけている。憎き人間であるこいつを殺せば、少しは気が晴れるかも知れない。

胸の裡にドス黒い感情が広がるのと共に気分が高揚していくのを感じた。

無力なモノに圧倒的な力を振るうときの優越感に似た感覚。

（そうだ、これが私だ。このような無様な生活が長すぎて忘れていたが、魔王とは相手の命を握り、支配するものなのだ）

リーゼロッテは、この男を殺すことが出来ることに酔っていた。ありったけの魔力を右手にこめ、男を見据える。

（これを放てば、こやつは見るも無惨な姿に成り果てるだろう。出来るならば、命乞いの言葉や悔しそうな表情を見たい。だがこいつを殺せるのは今この瞬間だけだ。）

男が死に絶える様を想像して、口元が歪んだ。男の寝息が聞こえてくる。

「幸せそうな顔をしておつて。そのまま死ぬることを感謝するが良い」
勝ち誇った笑みを浮かべ、聞こえるはずのない男に死を宣告する。

しかし、その死神の鎌が振り下ろされることはなかった。
男の顔めがけ魔力を放出する直前に、背中が粟立ち、脳裏に恐ろしい疑問がよぎったのだ。

（本当にこの男を殺せるのか？）

十中八、九殺せるだろう。リーゼロッテは思う。
目の前の男は人間、加えて睡眠中だ。どうして生き延びられようかわかっている。わかつてはいるのだ。

……だが、もしも殺せなかったら？ その言葉がリーゼロッテの弱い心を捕らえた。

この男を仕留めきれなければ、死ぬのは確実にリーゼロッテ自身。万が一は許されない。

しばしの葛藤。そして、リーゼロッテは恐怖心に敗北した。何度拭っても、首を吹き飛ばされた男が、起き上がってくる光景が消えなかったのだ。

慌てて魔力放出を中断したために、せき止められた魔力の奔流は出口を求めて暴れ回った。リーゼロッテは体を丸めて腕を抱え込み、今にも暴発しそうになる魔力を押さえつける。

魔力が沈静化し、右腕に痛みだけが残った。

「妾にはこの男を殺せないのか」

口元を赤く染めた男を見つめる。穏やかな寝顔だ。つい先ほどまで殺されそうになっていた事など気づいていない。静かな空間に男の寝息だけが響いていた。

第二話（後書き）

不定期更新ってことは、続けて投稿しても良いってコトですよ！

というわけで連日の更新。久しぶりだぜ、この感覚。

連続更新をしてしまうのは新連載だから仕方ないね。新しい靴を買ったとき、無性に外に出たくなるのと同じコトなんですよきつと。

第三話

目が覚めると見知らぬ天井が視界に飛び込んできた。何故か空いていたはずの腹はふくれている。理由はさっぱりわからないが、空腹が解消されたのだから問題ないと開き直すことにした。
深く息を吸い込むと、甘い香りが鼻腔をくすぐる。なんだか、気持ちが良い。

「ようやく目が覚めたか」

爺さんの様なしわがれた声でも、自分の低く響く声でもない初めての
の声音。起き上がって声のした方を見ると、そこには可愛らしい少女がいた。目はクリツとしていて、唇は薄い桃色をしている。細く短い金の髪を後ろで束ねており、うなじが目眩しい。
しかし、この髪型一体なんと呼ぶのだろうか。ポニーテールというには短すぎる。

しいて言うならば、

「ちょんまげ？」

「はあ？」

「なんでもない。ところでお前誰だ？」

「それは妾の台詞じゃ！」

突然の大声に耳がキンとする。

素朴な質問をしたただけなのに、大きな声で怒鳴ることはないではないか。きつとこれが切れやすい若者というものなのだ。爺さんが読

んでいた雑誌にそんなことが書いてあった。

「ファースト・ニューエイジ、十七歳独身。キャサリンに出会っために山から下りてきたばかりだ。ついでに爺さんの夢も叶える予定。……。それで、俺は倒れて意識を失ったと思ったのだが、あんたが助けてくれたのか？」

少女は俺の言葉に眉をひそめていたが、最後の質問を受けて考えるような素振りを見せた。かと思うと今度は俺の体を上から下まで見る。

「いやん、エッチ」

「やかましい！ お前を助けたのか、という質問の答えはイエス、その通りじゃ。たまたま妾が通りかけなければ死んでいたことじゃろう。感謝せよ」

腰に手を当てて胸を張る。小さな鼻がヒクヒクしていて可愛い。褒められたくて仕方がないのだろうか？ まるで子供だな。

「ありがとさん」

「感謝の念が足りんが、まあよい。妾は寛大な心の持ち主であるからな」

胸は小さいけど、という言葉を脳内で最後に付け加える。

「ところでこの辺りには街はあるのか？ 人とすれ違ふことすら無かったのだが」

「人とすれ違わなくて当然じゃ。この辺りに街など無い」

「どうということだ？」

俺の疑問に、哀れむような表情をする少女。

「山から下りてきたと言っておったが、本当に世間知らずのようじゃな。ここら一帯は旧文明時代に起った戦争のせいで、草木も生えぬ土地になってしまった。人が住むには厳しく、凶暴な魔物が多く徘徊しておることから『死の大地』と呼ばれておる」

「『死の大地』？　なんて言うか、安直な名前だな」

旧文明時代に起った戦争のことは少しだけ知っている。何でも昔は今では考えられぬ程の科学技術を持っていたらしい。資源を巡って戦争を続けた結果、国々は荒廃し繁栄の象徴であった科学技術は失われたらしい。

爺さんが神妙な顔をしてそんな話をしていた。本棚には他にも歴史に関する書籍が積まれていたし、恐らくそういうことに興味があったのだろう。

「こういうのは無駄に凝ったところで意味はないからの。そもそも妾がつけた名前ではない。文句があるなら初めに言い出した人間に言え」

「文句なんてない。むしろ覚えやすくて良いと思ったくらいだ。それで……」

一瞬躊躇う。どうしてこんな場所で暮らしているのか、という疑問をぶつけようか悩んだのだ。ほんの少しだけ興味はあるが、聞くと

面倒くさそうなコトになりそうだと勘が告げている。

目の前の少女は確かに可愛い。だが最近お世話になっていたキャサリンに比べると、決定的に劣っている場所がある。

もつと膨らみがあれば、もしくは数年後に出会っていれば話位は聞いてやったかもなあ、などと思いつつ、先の言葉に適当に続けた。

「ここからだ、どの街が一番近い？」

「ここからであれば、東に行った先にあるリーベル王国じやろう。グランディエダ大陸一の大国じゃ。ただ一番近いとなると寂れた村になると思うが」

「むう、村か。村娘……悪くない響きだ」

純朴な少女を思い浮かべる。おっとりした口調で、激しくされたら熱いリビドーが放出されてしまうかも知れない。いや、男勝りの元氣娘も捨てがたい。健康的に焼けた肌と素肌のギャップなどたまらないエロスを感じる。

「全く、なんという顔をしておる。念のために言っておくが、こちら側からはリーベルに入国することはできんぞ」

「なんだと!？」

「二十年ほど前に魔王が倒されてからというもの魔族は統制を失い、個々が好き勝手に暴れ回っておるのじゃ。そのせいで国境付近には警備兵が目を光らせておる。身分を証明できるようなものが無い限りすんなりとは通ることは出来まい」

「警備の目を誤魔化せば大丈夫なんじゃないか？」

「確かに入国することは可能かもしれん。じゃが宿も取れず仕事もない、こんな状況では街に暮らす意味もなかるう。実際妾がそうじやった」

緋色の瞳が僅かに揺れ、少女が小さく首を振る。やはり、こいつもそれなりの事情があるらしい。

「思っていた以上に社会つてのは面倒なんだな。しかし、それでは困る。俺はなんとしても街に行かねばならんだ」

「どうしてそれほどまでに街へと行きたがる？ 何も知らぬのであればいざ知らず、主ならばこの辺りでも十分生きていけると思うのじゃが」

「先ほども行っただと思うが、キャサリンに会うためだ。あとついでに爺さんの夢、最強であることを示す。これも人に会わねば話にならないからな」

「ふむ、最強であることを示すか……ならば妾に良い案があるぞ」

「それはあくまでもついでだ。だが一応聞いてやろう。良い案つてのはなんだ？」

俺の言葉に少女が渋面を浮かべる。

「……リーベルではなく魔王領に向かうのじゃ」

「魔王領？ そんなところに用はないぞ。第一リーベルに入国でき

ていないじゃないか」

「何も正攻法で入国するだけが方法ではあるまい。一旦魔王領へ赴き、城に巣くつておる魔物どもを蹴散らして支配するのじゃ。リールへは魔王軍として侵攻すれば良かるう」

「聞いているだけでも面倒くさそうなんだが。そんなことをして一体何の得があるって言うんだ」

「まずは、リールに入ることが出来る。そして、お主の言っておった最強を証明するならば、魔王軍という立場の方がやりやすかるう。放っておいても向こうから相手がやってくるのじゃからな、全て屠っていけば自ずと最強であることが明らかになる」

爺さんの遺書には何をしてはいけないといった内容はなかったはずだ。（読んでないけど）

目の前のこいつが言うようにそれが一番手っ取り早いのか？
待てよ………

「いや、駄目だ。その話には乗れない」

俺がそういうと、少女は心底不思議そうな表情を浮かべる。まさか断られるとは思っていなかったという様子だ。

「何故じゃ？ お主の望みを満たしておるではないか」

「確かに満たしてはいる。キャサリンも手下どもを使えば簡単に見つかるだろう。しかし、俺が望む女の子とのキャッキャウフフな展開が出来ないではないか」

「はっ？」

「わからないかな。俺は女の子といちゃいちゃしたいの！ 可愛くて、ボインで、乙女な女の子と！ 魔王なんかになったら嫌われ者になってしまうじゃないか。それは駄目だ。論外。話にならないね。だからお前の提案には乗れない」

「うぐぐ、そこまで否定せんでも良いではないか……………」

少女は自らの案を却下され目に涙を浮かべる。

そんなことをしても無駄だ。確かに女の涙はそえられるものがあるが、俺の決意は変わらない。

「そうじゃ、無理矢理の力尽くでは駄目なのか？ 魔王軍に入れば、どんな女でも思うがまま、主だけのハーレムをつくることだって可能なんじゃぞ。それに、主の性格ではとてもとても国王の下につくことなど耐えられまい」

「ハーレム、だと……………」

ハーレムとはあれか、曜日毎に違う女の娘とイイコトが出来る素敵な状況か？ イヤーマイツタナア、コレジャアカラダガタリナイヨオ、なんて言えるあれのことか？

それに無理矢理というのもなかなか……………

少女の言葉に心が傾く。いいな、ハーレム、凄くいい。一人の相手とラブラブいちゃいちゃするのも良いが、多くの女の子を囲うのもまた男の夢。

うう、どちらも捨てがたい。初めてはラブラブの状態でやりたいが、違ったプレイもやってみたいという気持ちもある。

迷う。実に迷う。

「どうじゃ？ 考え直してはみんか？」

少女が探るように問いかけてくる。
決めた。

「わかった。とりあえず魔王領を支配しよう。その後のことはそれから考えることにする」

迷ったらとりあえずやってみる。それが俺のポリシー。今そう決めた。

「そうかそうか、ならばこれから妾と主は同じ目的を持つ同盟者じゃ、主に妾の名前を授けねばなるまい」

「ん？ お前もついてくるのか？」

「当然じゃ。妾もこの時を長いこと待っておったのじゃからな。聞いて驚け、妾はかの魔王の娘、リーゼロッテ・エルレンケーニヒじや」

「ふーん、あつそう」

「反応が薄いのが。主にはそれほど期待してはおらんだが、ちつとは驚いてはどうじゃ、魔王の娘なんじゃぞ？」

リーゼロッテは、俺の反応につまらなさそうな様子だ。ただほんの一瞬だけ、安堵の表情が浮かんだような気がする。
見間違いか？

「興味ない。もう少しあれば話は別だったんだがな」

「どこを見ておる。これじゃから男は嫌なのじゃ。どいつもこいつも女とみれば、体ばかり見おる」

「バカを言うな、俺は顔も見ている」

「そういう意味ではない！」

こうして、俺とリーゼロッテは同じ目的を持つ仲間となった。魔王城にはどれ位の魔物がいるのか、行程はどの程度かかるのかを聞きつつ、部屋の中を眺め回す。

ドアが何故か歪んだ状態で嵌っていた。どうしてそうなったのかは知らないが、直していいところを見るとリーゼロッテは案外ものぐさな奴なのかも知れない。

魔王の娘だと言っていたからきつとこの想像は間違っていないはずだ。

あの後、俺としてはすぐにでも出かけたかったのだが、時間が遅いこともあり日が明けてから出発することになった。

寝ていなかったリーゼロッテにベッドを譲り、俺は食料庫にあったものを適当に食べ

しばらくすると、ベッドからリーゼロッテの寝息が聞こえてくる。男がいるというのに不用心な奴だ。俺でなければ襲われていてもおかしくはない。

気がついたら無警戒なリーゼロッテの寝顔をぼーっと見つめていた。ううむ、可愛い。爺さんの寝顔なんて見ようとも思わなかったが、やはり女の子だと違うものだ。

とはいえ、動きの無いものを見続けるのも飽きたので、俺はしわくちゃになった秘蔵書のしわを伸ばす作業に移ることにした。

胸を寄せて谷間にバナナを挟んだ表紙が目飛び込んでくる。

いつ見てもキャサリンはエロイ。男の心を惹きつけて止まない魔性のボディ、吸い付きたくなるほどぶるんとした唇、誘うようなトロンとした目つき、彼女の全てがエロスを体現していると言っても過言ではない。

その証拠に、彼女のお陰で最近はず中の肩甲骨の間も良いかとも思っていた程だ。

しかし、こんなにも美しい彼女も、既におばあさんになってしまっている。年月の流れというものは残酷なものだ。現役時代の彼女を生で見られなかったのは非常に残念ではあるが、それでも彼女に会ってみたい。彼女の本で白い涙を流した、いちファンとしての心情である。

一通りしわを伸ばした後、俺は仰向けに転がって目を閉じた。せめて、夢の中だけでも美しい彼女に会えたらと期待しながら。

第三話（後書き）

やっちまった。また、更新しちまったんだよ……………

というわけで、更新です。

リーゼロッテさんとの初会話ですね。可愛く書けているでしょうか？ 脳内妄想の得意な方であれば、バツチリですよ！
妄想力が無くとも思い浮かぶよう、もっと、生き生きと書いてあげたいものです。

ところで一つ質問なのですが、今回読みにくいですか？

今上げている形が下書きをそのままコピーした状態です。

前回、前々回は、これを見やすくするために空行を入れたのですが、どうですかね？（前々回は空行多め、前回は少なめ）

やっぱりこれだと読みにくかったりしますか？

縦書きだとそれほど気にならないんですが……………

第四話

道程はひたすら北に向かって歩き続けるだけという実に単調なものだった。

その道中に気がついたことだが、リーゼロッテも魔王の娘だけあつてそこそこ力はあるようだ。その辺の雑魚が相手なら俺が手を出さずとも、リーゼロッテが魔法で全てを焼き払ってしまう。

それだけの力があれば俺の助けなどいらんのではないか？

と聞いてみたのだが、本人の言うには、上級の魔物を多数相手取つて戦える程飛び抜けたものではないらしい。魔法が主要な攻撃であることが原因だそうだ。

三日ほどで死の大地を抜ける。その先には人の手が入っていない自然がそこにあつた。

「これはまた、先を進むには大変そうな場所だ」

「仕方があるまい。ここは魔王領と言えども中心地から遠く、立ち入る者がおらんかったのじゃ」

「なんで、誰もここに来なかったんだ？」

「理由は二つある。一つは守る必要がなかったからじゃな。人間がこちら側から攻め入ろうとするには死の大地を越えねばならぬ。わざわざ遠回りしてまで危険を冒すようなことはせんじやろう。魔王軍も人間との戦争で手一杯じゃったから、ここまで手が回らんかったのじゃ」

「なるほどねえ。案外魔王軍って弱いのか？」

「今は、な。戦争で手駒が足らなかったとはいえ、父上の御存命の時には人間どもなど木っ端に過ぎなかった。しかし、父上が勇者という選ばれた存在に敗れ、忠義の厚かった強者たちが死んでしまうてからは、見るに耐えん状況じゃ」

「ラッキーだな。今なら簡単に魔王城に落とせるってことか」

「まあ、そうなるな」

リーゼロッテが複雑そうな表情を浮かべる。やはり、人間の供を引き連れて魔王軍を倒すことに何か含むものがあるのだろうか。

もう一つの理由をリーゼロッテに尋ねようとしたその時、遠くから大地を振るわせるような低く重いうなり声が響いてきた。

「なんだ？」

「これが、もう一つの理由じゃ。魔王領にいる魔物でありながら、唯一魔王に従属しなかったもの。ドラゴンじゃ」

「ドラゴン？　はあ、なるほどねえ」

山のような大きな軀に、軽々と宙を舞うための力強い翼、鋭く大きな爪牙、と戦闘面において有利になる要素をあらかじめ詰め合わせた生物だ。まさに王者として君臨するために生まれてきたと言える。

「ちゃんとわかっておるのか？　幾ら力が強くとも、ドラゴンの鱗

の前には傷一つつけられぬ。じゃからドラゴンを刺激せぬうちに、さっさとこの熱帯雨林を通り抜けることじゃ」

「わかってるって。俺もドラゴンを殺すことに興味はないし、リーゼロッテの方針に異存はない。しかし、ドラゴンの卵ってのは美味いのかねえ。一度で良いから食ってみたいものだ」

「ドラゴンの卵は美味と言われておる。じゃが、入手が困難なこともあって滅多に流通するようなものではない。一生のうちに食べられたものは、数えられる程しかおらんじゃろうな」

「そう言われると俄然食べたくなってきたな」

「やめい！　そもそもドラゴンが産卵するのは数十年に一回。よしんばドラゴンに見つからず、巣までたどり着けたとしても卵が手に入る確率は低い」

「それじゃあ意味がない。今回は諦めることにするか」

「これからもじゃ！　馬鹿たれ」

リーゼロッテとギヤイギヤイ言い合いながら森を進んでいると、草陰から物音がした。

「ファースト」

「わかってる」

先ほどまでとは違ってかわって、鋭く研ぎ澄まされた様な瞳をするリーゼロッテ。これが俺にとっては意外なことだった。

なにしろ、彼女は魔王の娘であると豪語しているにもかかわらず、どんな雑魚にも決して油断をするようなことがなかったからだ。

俺からしてみれば、そんなに気張って疲れないのか疑問である。

リーゼロッテが警戒している中俺は辺りの気配を探る。

どうやら群れで狩猟するタイプの魔物らしく、俺たちを囲んでから、ジリジリと近づいてきている。ワイルドウルフか何かだろうか？ 辺りを静寂が支配する。やるかやられるか、一瞬の攻防を制するために駆け引きが行われている。リーゼロッテの額から汗が流れていた。

そんな時だった。

眼前から小さな虫羽をばたつかせながら飛んできた。虫は俺の鼻の下に止まり、鼻孔をその足でくすぐった。

ヤバイ、くしゃみが出そう。

鼻をすすってしまつと、虫が入ってきそうで出来ない。むずむずする鼻を抱えた俺は、今ものすごくアホ面になっているに違いない。だが、我慢にも限界がある。虫の足が鼻の入り口を刺激したことであっけなく陥落する。

「ハッ、ハッ、ぶうえつくしょん」

俺のくしゃみを合図に魔物達が飛び出してきた。飛び出てきたのはワイルドウルフよりも一回り以上大きい狼。フェリシアスウルフだったようだ。

ワイルドウルフよりも凶暴で、一旦獲物と定めると死ぬまで追いか
け回すという。大きな群れになると、奴らは自身よりも上位の魔物
を集団で狩ってしまうらしい。

フェリシアスウルフが大きな口から涎を垂らし、鋭い牙をむいて四
方八方から襲いかかってくる。

「ファースト！」

リーゼロッテの声に鼻をこすりながら顔を上げると、眼前まで牙む
き出しの口が迫っていた。

「うおっ」

視界の片隅で何となくは確認していたが、想像以上に近くにいて驚
く。

あ、ヤバイ。

そう思ってももう遅い。反射的に振るった右の拳が狼の顎捕らえた。
右手が一瞬だけ顎の下に生えている毛の柔らかさと、筋肉を感じ取
ったが、すぐに消えた。

顔にベチャツと生暖かい何かが付着する。狼の頭が豆腐のようにあ
っけなく、無惨に飛び散り、その破片が顔に掛かったのだ。

やってしまった、と思うよりも早く背後からの気配を感じた。

後ろの狼の鼻つ柱に後ろ蹴りをかまし、一瞬遅れてきた奴には左拳
を振り下ろす。地面へと叩きつけられた狼はしばらく悶え、絶命し

た。

その様子にほんの少しだけ満足感を得る。力加減を間違えなければこんなものなのだ。

対する狼たちかというと、ほんの一瞬で仲間が三匹骸になったことで機を逸したのを理解したのか、一度体勢を立て直すために後ずさる。

それで勝敗は決した。駄目だと思ったのならばさっさと逃げるべきだったのだ。

青い火の玉が狼に刺さり、火だるまになる。苦しそうにのたうち回るも火は消えない。数十秒後には燃やし尽くされた狼の死体だけがその場に残った。

「楽勝だったな」

「バカモノ、戦闘中にくしゃみをするとは何事じゃ！ 主は緊張感が足りなさすぎる」

「仕方がないだろう、鼻の下に虫が止まって耐えられなかったんだ。それに何も問題なかったじゃないか」

「一瞬の油断が命取りになる。今回は魔物であつたから良かったものの、人間であればもっと狡猾に隙を狙ってきたはずじゃ。実際父上もそれで勇者にやられてしもうた」

父の死を思い出したのか、リーゼロッテは俯いてしまった。

リーゼロッテが異常に緊張感を持っていた理由の一端が、何となくわかったような気がした。ただ、それだけでも無いのだろうとは思う。

「心配してるのか？」

「当然じゃ、主には魔王城の不忠者達を駆逐するまで生きてもらわねばならん」

「安心しろ、俺は死なん。俺が死ぬときは女の子の上だと決めているのだ」

「ふん、言っておれ。妾は魔王城さえ取り戻せば良い」

そう言つてプイツと顔を逸らしてしまった。

頬がほんのり赤いのは、心配していたことを指摘されたからなのか、それとも想像をしてしまったためなのか。

聞くだけ野暮つてもものだろう。

俺はリーゼロッテの頭をなでるため右手を伸ばす。

「ええい触るな。匂いに移る」

頭に触れるかどうかというところで手をはたかれてしまった。何事かと思つて右手を見る。そこには血で染まったそれがあった。

そう言えば、フェリシアスウルフの血がついていたのだ、と今頃思い出してげんなりする。

魔物と呼ばれる生物の血は、例外を除いて強烈な異臭を放つ。そして一度染みつくとなかなか取れない。そのため魔物は食用にも向かず、人間にとって有害でしかない存在だった。

「はあ、水辺が見つかるまでしばらくはこの状態か」

鼻をつまんで距離を取るリーゼロッテ。それに寂しさを覚えるが、俺でもきつとそうしたことだろう。とぼとぼと歩きながら、力加減を誤るといつ自らの失態について軽く反省することになった。

第四話（後書き）

第四話読んで頂きありがとうございます。

不定期更新と入れておきながらの連日更新について、若干の申し訳なさを感じております。

あっちの方が不定期じゃないか！ ごもつとも。

しかし、あれですな。物語の序盤というのはどこに向かってても良いので書きやすい。

徒然なるままに書けるといいうのは実に楽しい。勿論推敲はしていませんけれどね。

最近のマイブームはアクセスカウンターを眺めること。これは誰もがきつと通る道。私は既に一度通っているはずなのですが、止められませんかあ。

少しずつですが、数字が伸びるアクセスカウンターを見つづにやにやしています。

流石に二次創作のように急激な伸びはあり得ませんが、それでもやはり成果が出るといいうのは嬉しいものです。

処女作の序盤の伸びを振り返り原作の力は偉大だなあ、と感じたところで、今日の後書き、この辺で終わりにしたいと思います。

第五話

しばらく先に進んだ所で川を発見して、ようやく体についた血を洗い流す事ができた。べたついた体をすっきりさせたというのに気分は晴れない。俺は思わずため息をついた。

しかし、ため息をつくのも仕方がないというもの。何故ならリーゼロッテは、道中ろくに口も聞いてくれなかったのだ。臭いのはわかるが、そこまで露骨に嫌がらなくても良いではないかと思うのだが。何気なしに右手首の痣があるところを軽く嗅ぐ。

うへえ、まだ臭い。

先ほどよりもマシになったといえども、やはりすぐには落ちないようだ。

久しぶりに嗅いだ魔物の臭いに、爺さんのうんちくを思い出す。

魔物の血が臭い理由は諸説ある。異臭を放つことで他の魔物に食われないようにするためであるとか、血を浴びたものが魔物を殺せる程強いということを、他の仲間に知らせるためだとか言われているそうだ。

爺さんにこの話を聞いたときは、だからどうしたと思うばかりであった。

まあ、理由はわからなくてもないが、それで納得できるかという話は別、これが良い匂いだったらリーゼロッテも嫌な顔をすることは無かったのである。

俺は臭いの取れない右手を苛立ちながら擦り続けた。

そうこうしていると日も暮れてきた。場所も悪くはないので、今日
はここでキャンプを張ることになった。

臭いも目立つことはなくなったので、会話ができるようになったの
だが……

ちらりとリーゼロッテのに視線をやる。

流石にもう鼻をつまんでいないが、たき火を挟んで一定の距離を保
っていた。しばらくは近づきたくない、といった具合である。

別に近くに居るというわけではないが、それでも良い気持ちはしな
い。

「魔王の娘の癖に、魔物の血に反応しすぎだろう」

非難の意味を込めてちくりとさしてやったのだが、

「ふん、臭いものは臭いのじゃ」

と、まるでこたえた様子はない。

「まあ、それはわかるけどよ。お前も魔物みたいなもんだろう？」

俺の何気ない一言はどうやらリーゼロッテには禁句だったようで、
目をくわっと大きく広げると身を乗り出し、

「妾は人間から進化した誇り高き魔人族じゃ！ 魔物のような下等
生物と一緒にして貰っては困る。そもそも城におったのは魔人族

ばかり、妾は魔物など城を出るまで見たこともなかったわ。今は魔族の誇りを忘れた愚か者どもが、勝手に魔物を入れておるようじやが、妾が復権した暁には即刻放り出してくれる」

と一気にまくし立てる。どうやら彼女にとって魔物と一緒にされるのは心外なことであるらしい。難しいものだ。

とはいえ、一応魔物は魔王軍所属であつたはず。配下であつたはずの魔物をどれだけ毛嫌いしているというのか。

魔族というのはその能力の高さ故に、選民思想を抱いているのかもしれない。

「ともかく、城に辿り着いたその時は、主にも魔物掃除を手伝って貰うぞ。しかし、今日のように魔物の血を撒くようなことは許さんからな！」

「わかったよ。さてと、俺はちょっとあっちの方に行ってくる」

「いちいち言わずとも良い！ 勝手に致せ！」

俺が本を片手に立ち上がると、リーゼロッテは顔をリンゴのように赤くして怒鳴る。

そという反応が見たいからわざわざ申告しているのだ、といつになつたら気づくのか。

今日も変わらぬ反応を見せるリーゼロッテに満足しながら、俺は草場で日課に励むことにした。

一日一発。それが最低ノルマである。もはや中毒の域に達しているが、俺にとってはどうでも良かった。むしろ中毒で何が悪い。日課

は毎日続けるから日課と呼ぶのだ。

ただ極上のオカズも毎日だと飽きがくる。

豊かなセイカツを送るためにもそろそろ新しいものが欲しいものだ。そんなことを思いながら、今日もキャサリンのお世話になるのだった。

夜が明け、朝日が昇ろうかという頃に不穏な気配を感じて目を覚ました。途中まで二人で交代して番をしていたのだが、どうせ襲われることもないだろうと高をくくり、そのまま眠ってしまった。

だがどうやら認識が甘かったようだ。かなり近い距離まで接近を許してしまった。気配を消すのに慣れている。

リーゼロッテをちらりと見ると、気づいておらず、手をお腹の上で組み、すやすやと眠っていた。

仕方ない、俺一人でやるか。

俺は再び目を閉じて神経を研ぎ澄ます。近くを流れる川のせせらぎ、遠くで雌を呼ぶ虫の鳴き声、風になびく葉の音など不必要なものを耳から排除していく。

見つけた。

慎重にばれないようにと草を踏みしめる音、緊張で浅く早い息づかい、血を全身へと送る心臓の鼓動、それらが手に取るようにわかった。

四から五人の人型をした生物で、衣服は簡単なものしか身につけていない。知恵もそれなりにあるようだ。

ちなみに一人は女だ！

それはさておき、どうするか。

対処法に迷っていると研ぎ澄まされた聴覚が話し声を捕らえる。

「男と女の二人だけか？」

「恐らくそうだろう。近くを探してみたが、他に誰かがいるような形跡はなかった」

「とにかく、あの二人に聞いてみればわかることだろう。ニキ、ロープを貸せ」

困った。どうやらアイツらは俺たちを捕縛する気らしい。殺す気できてくれればさくつと殺ってしまったのだが……。仕方ない。

俺はおもむろに体を起こすと、不審者がいる方へと体を向けた。

「ロープで縛るのは勘弁してもらえないか。俺はどっちかっていうと、縛る方が好きなんだ。ああ、でも男を縛る趣味はないから勘違いしないでくれよ？」

草陰の向こうで驚くような反応がある。気づかれるのはまだしも、目的まで言い当てられて動揺しているところか。

「なにごとじゃ？」

動揺したことで気配が漏れたのか、リーゼロッテが起きてしまった。

「リーゼロッテは縛られるのは好きか？」

「何を言っておるかアホたれ！ ふん、害を為すものならばさっさと殺してしまえ」

「うーん、でも向こうはこっちの命を狙っていたわけでは無いし、それに一人女の子がいるからもったいないなーって思って」

「ならばそいっただけ残して、後は殺してしまえば良からう」

「………なるほど。それは考えつかなかった」

わりと真面目に感心する俺に対し、リーゼロッテは何ともいえない表情でため息をついた。

そんな微笑ましいやりとりにもかかわらず不審者達は警戒心を強めたようだ。もはや気配を隠すつもりはなく、代わりに先ほどまでは無かった殺気を感じる。

面倒ごととはさっさと片付けるに限る。

そう考えて立ち上がった時、一人の女が飛び出してくる。

「待ってくれ！」

「ニキ！」

後を追って男どもも出てきたが、眼中にない。

なぜなら俺は目の前の女に釘付けになったからだ。

軽装であるとはわかっていたが、まさかここまでとは………。

目の前のニキと呼ばれた女は胸も腰も簡単な布を巻き付けただけの衣装でそこに立っていた。褐色の山脈が布を押し上げ主張し、腰布の下にある桃源郷はもう少しで見えそうだ。俺はついついその場に屈み込みたくなる体を懸命に押しとどめる。やったらリーゼロッテがうるさくなるのは火を見るよりも明らかだ。

しかし、全く何ともエロ・・・心許ない装備であろうか。

俺のなめ回すような視線に、恥ずかしくなったのか目の前の女が思わず手で体を隠した。
恥じらう姿も良い！

「顔を引き締めろ、この色狂いが」

身も凍るような冷たい言葉が横から飛んできた。どうやら視線だけでなく、顔にも出ていたようだ。頬を張って緩んだ筋肉を引き締める。

気を取り直して女に話しかけることにした。

「それで何かな？　こちらの子が早く殺せとせつついてくるんだが？」

「待ってくれ。貴方たちを不快にしたことは詫びる、申し訳ない。しかし、こちらにも事情があったのだ。どうかこちらの話をきいてもらえないだろうか」

彼女の言葉に、リーゼロッテの方へ目をやる。自然と視線がぶつかった。そして、やれやれといった様子で首を振ってリーゼロッテが口を開いた。

「貴様らの話を聞いて妾になんの得がある？」

「お互いに被害が出ずにすむ。無駄な闘争は避けるべきだ」

「ふん、話にならん。貴様は勘違いしておるようじゃが、妾達は別に戦っても困らん。言っておる意味がわかるか？」

ニキという女の提案を鼻で笑い、煽るような言葉を口にする。言外に込められた対等ではないと言っているようなものだ。みるみる内に男達の目が鋭くなった。

場の修復は困難か？

リーゼロッテにどのような思惑があるのかさっぱりだが、悪いようにはならないだろう。

万が一そうなったとしても、どうしても出来る自信はある。

俺たちの自信を感じ取ったのか、女は頭を下げる。

「この通りだ。我々は無用な争いをするつもりはないのだ。ただ、貴方たちが龍神様に仇なす存在であるのなら、我々は全力で排除しなければならぬ」

「龍神様？」

しまった。つい口が滑ってしまった。

恐る恐るリーゼロッテを覗くが、表情に変化はなく、目の前にいる相手に視線を注いでいた。

とりあえずは怒っていないのか？

「この辺りの地を治めておられる龍のことだ。今年は数十年に一度の繁殖期で気が立っていらっしやる。我々は出来る限り龍神様の負担を減らすべく、こうして巡回をしているのだ」

「へえ、つまり今行けば卵が取れるってことか」

そう言った途端、彼女らからの殺気が増した。これが俺への答えとということだろう。

ドラゴンには興味はないが、卵には非常に心を惹かれる。忘れかけていた好奇心が、むくむくと起き上がってくるのを感じた。

しかし、リーゼロッテにも釘を刺されている手前、下手なことは出来ない。

別にリーゼロッテに遠慮する必要はないのだが、機嫌を損ねると面倒であるということがわかってる。積極的にそうしたいとは思えないのだ。

「そんなに怒るなよ、ちよつとした確認じゃないか。それでリーゼロッテ、お前はどうしたい？」

「・・・人間ごときが妾をどうにかしようなどと思ったことは腹立たしいが、興が削がれてしもうた。主の判断に任せる」

任せるって、煽るだけ煽って無責任なやつめ。しかも、微妙に睨むような目つきでこっちを見るし、一体何なんだ？

まあいい。

俺は男達の方へ再び視線を戻す。こいつらも腰布一枚という何とも

不愉快な装備だ！

殺すか？

俺はまだ人は殺したことがない。山には爺さんと俺しか人間はいなかったし。そう考えると練習にはもってこいの状況だ。

しかし、もう一方で殺す必要もないと思っている。進んでやるほど酔狂ではないし、この先嫌でもやることになるのだ。

それに、ニキちゃんはエロいし仲良くしたい！

事前に人間に会うことを想定していれば悩むことはなかったのだが・・・うん？ 人間がいるってことは集落があるってことか？

そこまで考えてニキ達をみる。少々歳がいつている者もいるが、ニキちゃんの肌を見る限り二十歳を越えてはない。それぞれに家族がいるとして、小さいながらもそれなりの人口がいると見て良いかもしれない。

「それじゃあ、ニキちゃんの集落に案内して貰おうかな？」

「何だと？」

「俺は集落がどんな風になっているか興味があるし、ニキちゃん達は俺たちがどんなやつかを判断できる。いざとなったら全員でどうにかしてしまえばいいだろ？ ほらお互い損はない」

「妾に得が無いではないか。そもそも寄り道している場合ではない」

「リーゼロッテは俺の判断に任せるって言ったじゃないか。それに

火急の用事でもないだろう。もう二十年も待ったんだ、今更数日遅れたくらいで変わりはないだろう」

俺の言葉にリーゼロッテが頬を膨らませてふてくされる。しかし、それ以上反論しなかったことから見ると、渋々ではあるが納得してくれたようだ。

ニキ達かというと、肩を寄せ合い小声で話し合っている。時折、「危険だ」とか「得体の知れない」とかいう言葉が聞こえてくる。

「わかった、お前たちを村に案内しよう。しかし、不穏な動きがあった場合、全力で排除することになる」

中年ほどのおっさんが威圧感たつぷりに述べる。

「構わない。そういう約束だしな」

ただ、その時になれば勿論全力で抵抗する。行動を起こすことは認めるが、それが可能かどうかは別問題なのだ。

リーゼロッテもそれがわかっていたため、それほど口うるさくは言わなかったのかも知れない。

そんなことを考えながら俺は、ニキちゃんのお尻の後について行くのだった。

第五話（後書き）

更新。

第五話を読んで頂きありがとうございます。

初めての人間との遭遇です。

おっさんが見ーてるーだーけー。名前も出ていないし、もう少し喋らせてあげたいんだけど、都合により却下です。

世間は世知辛いものなのよ。

とはいえ、ニキちゃんについてもレギュラーになるかは未定。エロス要因だけど未定。あんまり序盤で増やすのもなあ、って気分です。

増えすぎると書ききれない予感（という名の決定事項）がバシバシしますからね。

第六話

「ここが私達の住処だ」

案内された集落は、想像していたよりも大きなものだった。木でつくられたバリケードを抜けると、テントのような住居がところ狭しと並んでいた。

近くに居た住人たちは、遠巻きから俺たちを興味深そうに見ている。中には可愛い女の子もいて、俺のテンションは上がりっぱなしだ。ただ、男が視界に入ってくる度に下げられるのはどうにかならないものか。

苦々しく思いながら後について行くと、一際大きく立派なテントへと案内をされた。中に入ってみると、これまた立派な白ひげをたくわえた爺さんがいるではないか。

「長老ただいま戻りました」

「ニキかご苦労、よう帰った。後ろの方達は客人か？」

長老の細い眼が、リーゼロッテを見た途端に一瞬だけ鋭くなった。

「はい。グランの森でキャンプを張っていたので事情を話し、ついてきて貰いました。龍神様に対し今のところ害意のようなものは見られません」

「そうかそうか。であれば我らの友のようなもの、大いに歓迎しよう。ささ、お二人とも楽に」

俺たちは長老に促され適当な場所に座った。ニキちゃんは長老に頭を下げると、そのままテントから出て行ってしまう。

「何も無い場所じゃが、ゆっくりしててください」

「ふん、こんな場所に長居をするつもりはない」

「ほっほっほ、そうですかそうですか。それは残念ですが、お二人にも都合というものがございましょう」

リーゼロッテのとげのある言葉にも、眉一つ動かさずに流してしまふのは、流石年の功といったところであろうか。俺としては、この女の子もとい、この集落のことをじっくりとねつとりと調べたいところなのだが、盟友の様子を見る限りそれは難しそうである。

「悪いな長老。ところで、二、三日ほど世話になりたい。休める場所を用意してもらえるか？」

「ええええ、もちろんですとも。寝所はお分けした方が宜しいですか？」

「気が利くではないか」

「それほどの事でもございません」

あまりの腰の低さに、長老というよりは別の何かな気がしてきたのだが……。とはいえ、良くしてくれる分には全く問題は無い。下手に勘ぐって気疲れするのもバカみたいだ。

俺はそれ以上長老について考えるのを止めて、まだ見ぬ集落の美女達を夢想する。

こんな事をしている場合ではない！

「じゃあ、長老しばらくの間世話になる」

俺はすつくと立ち上がると、長老に礼を告げテントを出ようとする。

「案内役は必要ですか？」

案内役か。女であればいいが、男である可能性も否定できない。

「いや、適当に歩くだけだから必要ない」

「わかりました。それと、申し訳ないのですが、お嬢さんの方にはお話ししたい事がございます」

「私にか？」

長老が立ち上がりかけたリーゼロッテを呼び止める。リーゼロッテは口調だけは訊ねるようなものであったが、顔はそうではない。

リーゼロッテには長老の用事がわかっていようだが、俺にはさっぱりだった。

「話が終わるまで待つておこうか？」

「構わん。女の尻でも追いかけておれ」

「はいよ」

内緒話には興味があつたが、俺を待っている尻がある。

リーゼロッテからのお許しも出たところで、鼻歌交じりにウォッチングに出かけるのであつた。

「それで、話とはなんだ？」

リーゼロッテは目の前に座る長老に訊ねる。長老は姿勢を正し、深々と頭を下げて言った。

「姫様。いえ、リーゼロッテ様、村のものの無礼な働き申し訳ございません。その罪は我が命をもつて償わせて頂きたいと存じます。なにとぞ、村のものの達の命だけはお助けください」

「面を上げよ」

「いえ、そうはいきませぬ」

「二度は言わぬ。面を上げよ」

二度目の命で長老はおずおずと顔を上げた。

「お前の言う通り、妾は村人の無礼により、確かに不愉快な気分になった。本来であればお前ごときの命で償えるようなものではない事はわかるであろう？」

「仰るとおりでございます」

「ならばなんと心得る」

かしこまって頷く長老を傍目に、リーゼロッテは試すような言葉をかける。

「はっ、僭越ながら我が身をもってリーゼロッテ様のお力になる所存でございます」

「ふむ、続けよ」

「二十年前、リーゼロッテ様は魔王城を不屈き者の謀略により、やむなく撤退せざるを得なかったを聞き及んでおります。その後姫様は行方知れず。あの時己の職務を捨て、この地で安穩と暮らしていたことを悔いておりました。しかし、あれから二十年。リーゼロッテ様は、何の因果か私の村へといらっしやった。今日ばかりは神とやらを信じてとも良いと思つた程です。魔王城があるべき主のところへ取り戻すため、リーゼロッテ様が城へと向かうのであれば、どうしてその手助けをせずにはいられましょうか。今のお供はさきほどの男一人。ならば、このジークがやるべきことは一つ。共に魔王城へと向かい、主のために身を粉にして働きましょうぞ」

握り拳を胸に掲げ、その意気込みを言葉に託す。ジークの目は何一つ嘘をついているものではなかった。

「ふむ、見事な心構えよ。しかし、ジーク。お前はずいぶん歳を取つておるようじゃが、それで妾の足手まといにならぬと言えるのか？」

リーゼロッテの言葉にジークは先とうつてかわつてうつむき、小さくかぶりを振つた。

「姫様の仰るとおりでございます。魔王軍を離れはや百年。私自身、まだまだ若い者に負けるつもりはございませんが、それでもやはり寄る年波には勝てませぬ。ですが、この身、この命を賭して、リー

ゼロツテ様をお守りしとつございます」

「ジークよ。お前の忠誠心しかと受け取った。勇者の兇刃倒れた父上もお前のこと誇りに思つておろつ」

「ははっ、ありがたき幸せ」

「しかし、悪いがお前を連れていく訳にもいかん。お前もこの村で所帯を持ち、この地治める身分となつたのであるう？　ならば妾が勝手に奪つて良いものではない」

「リーゼロツテ様……」

「ふん、妾も存外甘くなつたものじゃ。久方ぶりに忠臣に出会つて情にほだされたのかもしれんな」

リーゼロツテは静かに天井を見上げる。それは彼女なりの優しさであつた。

「もつたいなきお言葉でございます」

部屋に男が鼻をすする音が響く。床に手をつき、擦りつけんばかりに、白の頭を下げるジークの目には滴が流れ出ていた。

しばらくすると、ジークは顔を上げる。二人の間に優しい沈黙が流れた。リーゼロツテは、かつてのように穏やかな笑顔を浮かべていた。

それから他愛のない会話が行われた。今までどのように暮らしていたか、どこで何を見、何を感じたかを喋るリーゼロツテ。

そして、話がファーストの事に移ると、ジークは姿勢を正し真剣な顔をしてリーゼロッテに言った。

「差し出がましくも、一つうかがいたいことがございます」

「なんじゃ？ 申してみよ」

ジークのただならぬ雰囲気を感じ、リーゼロッテも切り替える。

「はっ。リーゼロッテ様が供として連れていらっしゃるあの男。一体何者でしょうか？」

「やつの素性についてはよくわからぬ。ただ、人間にしては強大な力を持つておることだけは確認できた。せいぜい魔王城奪還までの手札じゃ」

そんなことが、とばかりに答えるリーゼロッテ。しかし、続くジークの言葉には驚かざるを得なかった。

「……あの男、本当に人間なのでしょうか？」

「何？」

「私もそれなりに長い年月を重ねて参りましたが。その中で多くことに出会う機会があり、また人を見る目には自信がありました。ですが、あの男を見た時からその自信が崩れ落ちてしまったのです。この世に生をうけてより今まで、あのような男は見たことがございません。愚鈍かと思えば鋭く。無害かと思えば、身を凍らせるような気質を持つている。まるで、そこに幾つもの人間が同時に存在しているかのような、ちぐはぐな存在。それを意識してではなく、自分でも気づいていない。まるで第三者が何かを隠すかために、ばらばらの布を縫い合わせ、男に被せたかのような、そんな違和感を覚え

るのです」

ジークの言葉には積み重ねきた年月の重みがあった。そして、それはリーゼロッテ自身が感じていた、ファーストへの違和感を見事に言い当てていた。

リーゼロッテは常々不審に思っていた。それが、今回確かな違和感へと変貌した。

ファーストには、人として生きてきたはずなのに、あるべきはずの倫理観が見られない。魔物や獣を殺すくらいならば不思議ではないが、相手が同族であればそれなりの葛藤が無いわけがない。加えてファーストは人を殺したことがない。

リーゼロッテの想像では、少なからず躊躇を見せるはずだったのだ。

だが、現実とは違った。

あのととき、ニケ達を煽りファーストの動向を覗いていたが、奴からは同族を殺す事に忌避感も高揚感も感じられなかったのだ。

ただただ、無感動に人を殺すことを受け入れる。それは、決して人を殺したことがない人間にたどり着けるような境地ではない。

ジークに言ったとおり、奴は貴重な手札だ。だが、同時に自らを滅ぼす毒にもなりかねない。

リーゼロッテの脳裏に、あの時の光景が蘇る。

今は全く感じられないが、初めて小屋で出会った時のあれが、奴の本性なのだろうか？

さつきとは違う沈黙が二人の間に流れる。

しばしあって、気を取り直したリーゼロッテが口を開いた。

「考えてもわからぬものに時間を費やしても仕方がない。今重要なのは、城を取り戻すのに、ファーストの力が必要であるということだ。ジーク、妾は少し疲れた。寢所まで案内せい」

「・・・・・・・・かしこまりました」

有無を言わせぬ言葉にジークはそう答えるしかなかった。

第六話（後書き）

第六話更新です。

お時間を頂きありがとうございます。

尻だと思ったか！ 爺さんだよ！

調子に乗りました。すみません。

さて今回登場したジークさん。やっぱり辺鄙なところにある集落と
言えば、長老ですよ。

ただの長老では面白くないというわけで元魔王軍という設定を付け
加えてみました。リーゼロッテさんの魔王の娘っていう設定も消え
かけてましたしね。

ここまで読んでガツクリとなさった読者の皆様。激しく今更感があ
るのですが、私の書く小説は基本こんな感じで出来ています。

それでも良いぜ！って方も、そうでない方も、これからもおつきあ
い頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5786y/>

最強伝説

2011年11月22日22時50分発行